

ワイルドと世紀末

荒井 良雄

日本ワイルド協会の夏期セミナー「ワイルドと世紀末」が行なわれた年1984年には、二十世紀末がマスコミで賑やかに取りあげられた。その丁度百年前の1884年、ワイルドはコンスタンスと結婚、翌年には長男のシリルが生まれた。その頃のワイルドは、すでにロンドンの文壇に登場していて、1880年に最初の戯曲『ペラ』を完成、1881年には最初の詩集を出版した。それ以後、ワイルドは、自他ともに認める世紀末を象徴する文人として、詩、劇、小説、評論、童話などのジャンルで、芸術至上主義的な立場を貫き通し、世紀の変わり目である1900年に、パリで客死した。したがって、ワイルドこそは、文字通り、世紀末そのものを生きた人であったといえよう。

ところが、二十世紀末が近づいて、マスコミが話題にしているのは、ワイルドではなくて、ジョージ・オウエルである。「タイム」60周年記念号の巻末を飾ったエッセイでは、管理社会の恐怖を描いたオウエルの『1984』を大きく扱っていたし、「文芸春秋」1984年新春号の目玉論文も、香山健一氏の『1984年』論だった。1984年は、世界中で、オウエルを扱った単行本や論文の出版が目立った年であった。

しかし、私は、現在の世界状況を考えるとき、ワイルドこそが話題にすべき作家だと考えているのである。日本ワイルド協会が、夏期セミナーで「ワイルドと世紀末」というテーマを取り上げたのは、先見の明があったといたい。私が、今、ここで問題にしたいのは、芸術至上主義者としてのワイルドではなくて、ウィットとしてのワイルド、機知の人としてのワイルドであり、その中核をなしているパラドックスである。

ワイルドの最も有名な言葉に、「芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する」というのがある。ワイルド的な芸術至上主義の色彩が濃厚な名言だが、実は、これがパラドックスなのである。また、ワイルド喜劇の最高傑作である『まじめが大切』は、全篇がウィットの塊のような作品で、テーマや構造やセリフに至るまで、パラドックスの効用が見事な効果をあげている喜劇である。その上、この喜劇の初演を前にして、ワイルドがロバート・ロスの質問に答えて、この喜劇には「人生のあるゆる馬鹿げたことを真面目に扱い、人生のあるゆる真面目なことを、真剣にしてかつ慎重な馬鹿さかげんで扱うべきだ」という哲学があると語った言葉にも、パラドックスが含まれている。

有名な格言に、「逆もまた真なり」というのがある。「どの問題にも二面あり」という英語の格言もある。シェイクスピアの悲劇『マクベス』の冒頭の場面にある魔女のセリフは、「きれいは、きたない。きたないは、きれい」、そして仏教の原点である「般若心経」の根本思想を表現しているのは、「色即是空、空即是色」である。これらが、みんなパラドックスであることを考えてみてほしい。

核戦争による人類絶滅の可能性がある現代の世界に生きる私たちが、二十世紀末を迎えるにあたって到達した英知は、共存の精神であり、競争よりも協力であり、バランス感覚つまり平衡感覚の必要性だが、これらは、すべてパラドックスの原理によって、はじめて可能になるのである。

ワイルドは、十九世紀末に、「病的なまでにパラドックスを多用した」が、実は、それが二十一世紀に向って世紀末に生きている私たちへの警告であり、私たちに必要な思考と行動の原理だったのである。

「パラドックスは危険である」とワイルドは忠告した。それは、両極の存在価値を認めないで、言葉や頭の中だけでパラドックスをもて遊ぶシニカルな態度に対する警告であったはずである。ワイルド自身は、人生でも、芸術でも、それこそ命がけで、真剣に生き抜いた、純粋な人間であったことを忘れてはいけない。『獄中記』の中で繰り返される有名な言葉、“Everything that is realised is right.”が、そのことを物語っている。

米ソ両極の共存と協力なしに平和はありえない二十世紀末を考えると、現状での資本主義と共産主義の共存を認めて、香港返還にふみ切ったイギリスの行き方にも、パラドックスの原理は生きている。

私が、二十世紀末に、オウエルでなく、ワイルドを持ち上げて、かつぎ出した理由は、物事が行き詰まったとき、「逆もまた真なり」、パラドクシカルな見解が道を開く効用を指摘したかったからである。

(駒沢大学教授)